

# 小学1年生の朝の会におけるフリートークの内容

中島 寿子・志賀 直美\*

A Study on Contents of First Graders' "Free-Talk" Activities in Morning Meetings

NAKASHIMA Hisako, SHIGA Naomi\*

(Received September 27, 2019)

## I 問題と目的

附属山口小学校では朝の会においてフリートークを行なっている。フリートークは「話題に沿って子どもが自分の考えを述べ合う話し合い活動」であり、①一人の子どもが話題提供をする、②みんなで話題について話し合う、③話し合いについて振り返る、④教師が価値付けをする、という流れで行なわれる。この活動は「話す力、聴く力、話し合う力を育てる話し合い活動と思われがち」だが、第一義は「『分かり合い、支え合う』仲間関係をつくること」にあり、「仲間の考えに共感したり、仲間のよさを感じたりすることができる子どもを育てていきたい」という願いがあるという。

その話題は主に「仲間の好みや生活の様子について問うタイプ」（「好きな〇〇は何ですか?」「AとBどちらを選びますか?」等）、「生活上の気持ちや願望について問うタイプ」（「もし、〇〇だったら、どうしたいですか?」等）、「生活上の問題の解決方法について問うタイプ」（「どうしたら、～できますか?」等）に分けられ、フリートークの充実のためには、「楽しかった」「よかった」「またしたい」という思いや願いが積み重なるような教師の支援が必要であり、「話した内容、話し方、聴き方」という観点で子どものよさをとらえ、しっかりと「価値付ける」ことが大切であるという（松岡, 2012）。

しかし、このような活動は小学校生活を始めたばかりの1年生にとっては容易なことではなく、教師は幼児教育との接続も考えて支援することが必要となる。そこで、本研究では幼稚園での保育経験もあり、1年生の担任経験も重ねてきた教師が担任するクラスにおける実践を取り上げ、以下の点について検討したいと考えた。

○小学1年生の子どもたちは、朝の会においてどのようなフリートークを行なうのか

○教師はフリートークにおいてどのような支援を行ない、その支援によって、子どもたちのフリートークの内容はどのように変容するのか

## II 研究の方法

### 1 対象クラス

201X年度附属山口小学校の1年生のクラス（男児18名、女児17名、計35名）。担任の志賀直美教諭（40代女性）は公立小学校での教職経験後、人事交流により附属幼稚園で4年間保育経験をし、公立小学校に戻ってから3年連続で1年生を担当した後、201X年度に附属山口小学校に赴任した。

### 2 観察の方法と対象とする実践

201X年度の5月から3月まで、共同研究者である中島が対象クラスの朝の会を観察し、デジタルカメラで映像記録を行なった。対象クラスでは入学当初から朝の会で話し合い活動を行なっていたが、フリートークを始めたのは夏休み明けの8月末からであった。そのため、入学当初からの話し合い活動も観察し、その後のフリートークとの関連を検討することにした。5月から7月までの話し合い活動を15回、8月末からのフリートークを35回、計50回観察した。観察後に中島が映像記録をもとに、子どもたちの言動や志賀教諭の支援をできる限り文字化した。志賀教諭・中島で映像記録や文字化した記録をもとに討議する機会も設けた。

本研究では観察した35回のフリートークのうち、教育実習生が朝の会を担当した5回を除く30回を対象とした。また、志賀教諭は8月末から3月までの計87回のフリートーク（17名が3回、18名が2回担当）の話題や子どもの発言をノートに記録していたため、話題についてはその記録も合わせて整理し、志賀教諭が不在であった4

\* 山口大学教育学部附属山口小学校

回を除く83回を対象とした。

以下、志賀教諭をS、中島をNと表記する。子どもたちもアルファベットで表記する（男児18名はA男からR男、女児17名はa子からq子）。紙幅の都合より、事例に取り上げるフリートークは、いずれもその一部をまとめたものである。

### Ⅲ 結果と考察

#### 1 フリートークを開始するまでの話し合い活動

概要は以下の通りである（中島他，2019）。

##### （1）健康観察時に日直が決めた話題について話す

Sは子どもたちが安心して小学校生活を始められるように、入学式の日「失敗したから分かること、できることがある」「トラブルをチャンスにしていこう」と伝え、クラスで困ったことが起きるたびに「失敗してもいいんだよ」「どうするとよいかみんなで考えよう」と話していた。Sは「子どもの困り感からやさしさが生まれる」とも考えており、「〇〇ちゃんが困っているの、わかる？」「みんなで助けてあげて」「手伝ってあげて」ともよく話していた。

Sはそれまでの経験から「入学当初の子どもたちはフリートークをする段階にはない」と考え、朝の会では「自分の存在を友達に知らせる」「いろいろな友達の存在を知る」ことで仲良くなれるように、「全員が話したいことがあり、話せる場を作れるように」と願い、健康観察時にSが提供する話題について話すようにした。すると、すぐに「〇〇のことを言いたい」と言う子どもが現れたため、その日の日直が話題を決めるようにした。この活動には、フリートークに取り組むことも見通して、「自分の生活を振り返って話題を探す」「日直二人で話し合っただけで話題を決める」「話題によって面白さが違うことを体感する」ことが経験できるようにという願いもあった。具体的には、①日直2名が決めた話題を伝える、②一人一人の子どもがSから名前を呼ばれ、「はい、元気です」等答えて日直が決めた話題についても話をする、③子どもたちがSを呼び、Sも「はい、元気です」等答えて話題についての話をし、という流れで進められた。

Sは「理由を聞くと友達のことがもっとよくわかる」経験もしてほしいと考え、国語で「わけをいおう」を学習した頃に「わけが言えますか？」と聞き始めた。すると、子どもたちは「どうしてかと言うと～」と学習したことをいかして理由も話すようになっていった。

##### （2）クイズトーク

7月からは「クイズトーク」を開始した。この活動は「1、2年生には、話し合い活動だけに集中することは困難」なため考案された「具体物を使ったりクイズの要素を取り入れたりする」「フリートークの低学年版」で

ある（桂，2006）。具体的には次のように進められた。

①「宝物」を持って来た子どもが考えてきた3つのヒントを出す。どのヒントにも「質問タイム」を1分とり、他児は質問しながら「宝物」が何かをあてる。②「宝物」を持って来た子どもが「宝物」（または写真）を見せながら紹介し、その理由も話す。他児からの質問にも答える。③クイズトークを聞いたSから話をする。

この活動は国語の「たからものをおしえよう」とも関連しており、Sは初回を国語の時間に行ない、「話し方、聞き方のお勉強です」と伝え、「みんなの力」で「正解」を見つけるよう話をした。子どもたちは自分の「宝物」を紹介できることを楽しみにし、友達の「宝物」も知りたいという思いから自分なりの質問をしていたが、「正解」が出ないままのことも多かった。

Sは毎回最後にその日の子どもたちの具体的な言動を取り上げながら、聞き方を工夫すると「宝物」が「わかる」こと、「宝物」に込められた「思い」が「伝わる」ことは「素敵」であることを丁寧に確認していった。

夏休み前までに全員が1回ずつ担当すると、Sは子どもたちとそれまでのクイズトークについて振り返り、「もっと仲良くなるために」フリートークもやってみることを提案した。その数日前に隣のクラスでフリートークを参観したこともあり、子どもたちからはやってみようという声があがっていた。

#### 2 フリートークの実践

夏休み明けから開始したフリートークは、次のように進められた。①一人の子どもが話題提供をする（ホワイトボードにも書き、黒板に掲示する）。自分の考えも話す。②フリートーク：他児が話題について自分の考えを話す（5分）。③振り返り：話題提供者が話を聞いて思ったこと等を話す。他児も自分の思ったこと等を話す（2分）。④フリートークを聞いたSから話をする。

##### （1）【事例1】初めてのフリートーク

初回はSが話題提供者となった（表1参照）。話題は子どもがどちらかを選べば答えられる「なつとふゆ、どっちがすきですか」にし、話題提供者がどのように話してフリートークを進めていくのかモデルを示していった。子どもたちが自分の考えを話す機会も作り、子どもの話にならぬと応えたり、「みんな」に向けて話すよう促したり（下線部①）、伝わりにくい発言には質問しながら考えを確かめ、どのように話すかよいか伝えたりもしていた（下線部②）。

その後、「みんなの話を聞いて思ったこと」を話す機会も作り、振り返りでの話し方についても確認していった。「できると思ってやったら、できました」という発言には「よく話せてます」（下線部③）、「みんなのこ

表1 【事例1】初めてのフリートーク 8月30日

<p>話題提供</p>	<p>S「今日のお題はS先生が出します」ホワイトボードに「なつとふゆ」と書いて見せる。・「あ、どっちがすきですか?」・「やったー!」                  S「今日のお題は、夏と冬どっちがすきですか」「どっちが決めて」「どっちがいいって言うんですが」 H男「わけを言うの?」                  S「うん、わけも。今から先生言っている?」 H男:うなづく                  S「S先生は、夏がすきです。どうしてかと言うと」・「楽しいから」・「誕生日やから」 S「誕生日。夏生まれだから」 k子「あ、私も」                  S「どっちがすきかなって聞いてみたいので、今日話したいと思います」「5分で今からどどん話してあてていきたいと思います」</p>
<p>フリートーク</p>	<p>(以下は発言の一部)                  q子「私は夏がすきです。どうしてかと言うと、海やプールに行けるからです」 S「ああ、なるほど」                  H男「ぼくは冬が(一番前の席でSに小さな声で話し出す)」 S「<u>立って。後ろに向かって</u>①」                  H男「(座ったまま後ろを向き)ぼくは冬がすきです。どうしてかと言うと、冬は遊べるからです」 S「<u>夏も遊べるんじゃないの?</u>②」                  H男「冬の方がすきなんだよ。雪で遊べる」 S「<u>あ、じゃあ、雪で遊べるからって言った方がいいね</u>②」                  P男「ぼくは夏がすきです。どうしてかと言うと、セミとかが捕まえられるからです」 S「おお」                  g子「私は冬がすきです。どうしてかと言うと、雪で遊んだりアイスを食べる」・「え?」・「アイス食べる?」                  S「冬にアイス食べるの?」 g子:うなづく (タイマーが鳴る) 子どもたち:「えー!」と叫ぶ                  S「22人も」「5分間でしゃべった」「しゃべれなかった人、どのくらいいる?」 子どもたち:数名挙手する                  S「初めてやけん、言わせてあげよう」 子どもたち:さらに10名が話す</p>
<p>振り返り</p>	<p>S「お題を出した人が、もう1回みんなの話を聞いて思ったことを言います」「フリートークをして、どんなことを思いましたか?」                  j子「初めてやったけど」「面白いし」「まだ、何回もやりたい」                  f子「最初はドキドキしたんですが、でも、できると思ってた、できました」 S「<u>パッチリです。パッチリ。よく話せてます</u>③」                  b子「みんなのことをたくさん知れて、みんなももっと仲良くなれそうだなと思いました」 S「<u>そしたら、もっと仲良くなる。いいなあ</u>④」</p>
<p>Sの話</p>	<p>S「自分だったらどんな題出す?」「考えてみた人いる?」・「考えてない」・「ある」・「考え中」 S「<u>考えておいてください</u>」                  S「<u>じゃあ、ちょっと、姿勢をピンとできる?</u>」 子どもたち:姿勢を正して座る                  S「<u>話してる時に、話したいなあって思うのは、聞いている人がどんなふうになっている時かわかる?</u>⑥」                  b子「話している人の顔とかを、よく見てくれたら」 c子「姿勢をよくする」 B男「耳をすます」 D男「体を向ける」 B男「心も」                  S「子どもたちの発言を板書して整理する。「これ、聞き方ね⑥。みんなよくわかっているんだなーと思いました」                  S「先生、実はね、c子さんに、いつもしゃべりたくなるんだけど⑥」 c子:笑顔になる                  S「(p子を手で示して)あ、今やってくれた」「うんうんってね、うなづきながら」「聞いているの」「今p子さんが『うん』って」「うなづくってわかる?」「どう思っているか、しらせる?そうだねーとか⑤」 子どもたち:口々に話す                  S「さらに子どもの発言を板書する。「自分でもね、こんなことをやってみて」「話しやすいようにね、手伝ってあげてくれる?⑥」                  「話し方、とても上手でした。次は聞き方です。頑張ってください⑤」</p>

とをたくさん知れて」「もっと仲良くなれそう」という発言には「いいなあ」(下線部④)と応えたりもしていた。自分が担当する時までに話題を考えておくようにも確認し、話す人が話しやすい「聞き方」についても問いかけ、子どもたちの発言を整理して確認していった。そして、「こんなことをやってみて」「話しやすいように」「手伝ってあげて」と伝えていた(下線部⑤)。

子どもたちは入学当初から話題について自分の考えを話したり友達の話聞く楽しさを経験し、フリートークの参観もしていたため、進め方を理解するのも早かった。この日は話したい子どもの気持ちを大切にSが時間をとり、ほとんどの子どもが話をしていた。

(2) 子どもたちが考えたフリートークの話題

子どもたちが考えた話題について、松岡(2012)を参考にS、Nがそれぞれ分類したところ、その一致率は96.4%であった。不一致の部分については協議をして再分類した。その結果を表2にまとめた。

当初はSにならない、「ア 仲間の好みや生活の様子について問うタイプ」の「AとBどちらがすきですか?」という話題が多かったが、次第に少なくなり、同じタ

イプの「すきな〇は何ですか?」「何の〇がすきですか?」が多くなった。後者の方が自分の「すきなもの」「すきなこと」について友達から様々な話を聞くことができ、自分と「おんなじ」と思ったり、友達の発言が予想通りで「やっぱり」と思ったりする喜びを味わうことができるためではないかと考えられる。

「イ 生活上の気持ちや願望について問うタイプ」の「もし〇〇だったら～」という話題も増えていったが、「何がいいですか?」という問い方が多く、やはり自分の「すきなもの」「すきなこと」について話したい、聞きたいという思いがうかがえた。

一方、「ウ 生活上の問題の解決方法について問うタイプ」の話題を考えた子どもはいなかった。1年生の場合、生活の中でそのような思いが生まれた時に教師が話題にするように勧めてみる等の支援をしなければ、このような話題は出てきにくいだろう。また、このような話題について話し合い、「楽しかった」「よかった」「またしたい」(松岡, 2012)と実感するには、さらに学年が上がる必要もあるだろう。

子どもによって話題に特徴があるかを検討すると、か

表2 子どもたちが考えたフリートークの話題

タイプ	例	8月31日 ~11月12日	11月14日 ~2月8日	2月12日 ~3月19日	計
ア 仲間の好みや生活の様子について問うタイプ	「AとBどちらがすきですか？」（選択肢が3つの場合も含む）	20	2	0	22
	「すきな〇は何ですか？」「何の〇がすきですか？」等	3	13	8	24
イ 生活上の気持ちや願望について問うタイプ	「もし〇だったら～したいですか？」等 （「もし」がない場合も含む）	8	16	8	32
ウ 生活上の問題の解決方法について問うタイプ	「どうしたら～できますか？」等	0	0	0	0
エ その他	ア～ウとは違う問い方をしている話題	1	3	1	5
計		32	34	17	83

注) クラスの子ども全員が1回目と2回目に話題提供を終えた11月12日と2月8日で区切り、3期に分けて話題をまとめた。  
Sが不在で記録が残っていない日があるため、1回目、2回目とも合計は35名分になっていない。

表3 子どもたちが考えた話題の具体的な内容

子ども	日にち	話題	タイプ
B男	9月7日	なんのえいががすきですか	ア
	11月21日	なんのほんがすきですか？ずかん・まんがでもいいです	ア
	2月22日	すきながつきはなんですか <b>【事例5】（表7）</b>	ア
g子	9月14日	にわとりとひよこ、どっちがすきですか	ア
	11月28日	うみのいきもののなかで いちばんすきなうみのいきものはなに	ア
	3月4日	もし、すきなとりをかえるなら、なにががいいですか	イ
D男	9月27日	とうきょうオリンピックにでるなら なんのきょうぎがいい	イ
	12月3日	すきなせんしゅはだれですか？	ア
	3月8日	もしスポーツのものをもらえるならなにがいいですか ローラースケートでもいいです	イ
k子	10月3日	もしきょうだいがあるなら だれがいい	イ
	1月9日	もし、日本がなかったら どのくにに すみたいですか	イ
	3月19日	もしドラえもののどくぐがつかえるならなにがいいですか <b>【事例6】（表8）</b>	イ
n子	10月18日	じぶんがやった一つのおもうときは いつですか <b>【事例3】（表5）</b>	エ
	1月21日	いますぐうたいたいというたは なんですか	エ

なりの個人差が見られた。2回ないし3回の話題に何らかの共通性が見出された子どもの話題の例を表3にまとめた。例えば、B男は3回とも「ア」のタイプでも何がすきかという話題であり、k子は3回とも「イ」のタイプの話題であった。

話題のタイプは違うが、内容に共通性がある子どももいた。g子は1・2回目は「ア」のタイプ、3回目は「イ」のタイプであったが、いずれも生き物についての話題であった。D男も「ア」と「イ」のタイプがあったが、いずれもスポーツに関する話題であった。この二人は健康観察時に日直が決めた話題について話していた頃、「大きくなったら何になりたい」（5月30日）という話題に「水族館の館長」（g子）、「プロ野球選手」（D男）と答えており、その後も二人の話の中には「生き物」「スポーツ」がよく出てきていた。

「ア」～「ウ」のタイプとは違う問い方で話題を考えたn子のような子どももいた。n子は1回めのフリートーク後にNに「家でお母さんと話していてひらめいた」と話しており、自分なりの話題を一生懸命考えた様子がうかがえた。

(3) 子どもたちによるフリートークの実際

①【事例2】「ようちえんとしょうがっこう どっちがすきですか」

はじめに、当初多かった「AとBどちらがすきですか？」という話題の事例を取り上げる（表4参照）。

【事例2】のf子が考えた話題は、「ようちえんとしょうがっこう どっちがすきですか」であった。小学1年生の学校生活も半ばになり、附属幼稚園との交流の機会が増えた頃のことである。

f子は【事例1】で「最初はドキドキした」（表1「振り返り」欄参照）と話していたが、この日も緊張した様子で、いきなり話題から話し始めたり、振り返りでは話し始めるタイミングがつかめず躊躇している様子であった。そのため、Sはf子に話題提供者として話すタイミングや話し方について確認をしていた（下線部①）。フリートークを始めて間もない頃は、どの子どもも初めて話題提供を担当するため、Sはこのような支援をすることが多かった。

f子は「楽しいから」幼稚園の方がすきだと話し、その後「幼稚園」と答えた子どもたちも、園生活の中で

表4 【事例2】9月13日 「ようちえんとしようがっこう どっちがすきですか」

話題提供	f子「今日のお題は」緊張した様子で話し始める。 S「あ、今からフリートーク始めますって①」 f子「今からフリートークを始めます」 子どもたち「イエーイ！」拍手する f子「今日のお題は、幼稚園と小学校、どっちがすきですか。私は幼稚園です。どうしてかと言うと、楽しいからです」
フリートーク	子どもたち「ハイ！」と挙手する。f子から「〇〇さん」と指名された子どもが話をしていく。(以下は発言の一部) G男「ぼくは幼稚園がすきです。どうしてかと言うと、みんなと弁当を食べたりできるからです」 Q男「ぼくは学校がすきです。どうしてかと言うと、友達がいっぱいいるからです」 H男「いいこと言うなー」 i子「私は小学校がすきです。どうしてかと言うと、工夫ができて、くわしくなれるからです」 g子「私は幼稚園がすきです。どうしてかと言うと」「靴とかマフラーを、毛糸で作れるからです」 i子「そうなの」 ・「そうだよ」 (タイマーが鳴る) ・「言いたかった」 ・「あー、終わり」 S「言いたかったね」
振り返り	f子：緊張した様子で黙っている B男「そう言えば、言っていないやん」 f子を指さして S「うん。今から言うよ。どうぞ②」 f子「幼稚園と小学校が、半分かと思ったけど、半分ずつかと思ったけど、幼稚園、幼稚園の方が多かったので、びっくりしました」 「みんなはどう思いましたか？」 (他の子どもたちも「幼稚園の方が多かったからびっくりした」という発言が多い) 最後にL男が発言する。「このお題はあんまり挙げる人が少ないかなと思ったけど、多いのでびっくりしました」
Sの話	S「お話しますね③」「みんながどっちが多いかなって言った時、先生ちょっと教えてみました」「幼稚園って言った人8人」 ・「え？」 S「小学校って言った人、9人いたんです」 ・「え？」 S「実はfさん、予想通りでした」「で、今日話して思ったこと④は、H君が「いいこと言うなあ⑤」って言ったんよ」「でね」「何人かの人が『そうなん』って言ったんよ。それは、人のお話をよく聞いて、どんなことを思ってるかな⑥って、周りの人に伝わるよね」「話す人がね、いい気持ちになる?」「うなずいたり、うんうんって、そうなんって思ったり、そういうのが、話を聞く時に大事だなと思いましたので、H君どどんやってみてください⑦」 H男：うなずく S「最後にL君が『今日のお題は』って」「お題について言いました。それもよかったです。初めて言ったよね⑧」 L男：うなずく S「時計を見て下さい。ちゃんと終わりましたよ⑨」 Q男「1分すぎちゃったけどね」

楽しかったことを理由に挙げていた。様々な園から入学しているため、自分とは違う園生活を送った友達の話に「そうなの」と興味をもつ子どももいた。「小学校」と答えた子どもたちの理由には、「工夫ができて、くわしくなれるから」という興味深い発言もあった。「友達がいっぱいいるから」という発言に、「いいこと言うなー」とつぶやく子どももいた。

振り返りでは、f子が「幼稚園の方が多かったので、びっくりしました」と話すと、その後も同様の発言をする子どもが多かった。f子の話に共感したこともあるだろうが、当初は振り返りで話すことを思いつくのは難しいようで、このように前の子どもが話したことを真似て話すことが多かった。

Sは毎回フリートークの時間は机につき、子どもたちの話を聞きながらノートに記録していた。そして、振り返りまで終わると、この事例で「お話しますね」(下線部②)と言っているように、子どもたちの前に立って声をかけ、「これからは教師の話を聞く時間」という区切りをつけていた。そして、ノートを見ながら「今日」「思ったことは」(下線部③)と、その日の子どもたちの具体的言動を挙げながら、話をしていた。この事例では、「いいこと言うなあ」「そうなの」と言って聞くことは「話す人」が「いい気持ちになる」ので「大事」(下線部④)と話しているが、このような聞き方については【事例1】でも話しており(表1「Sの話」欄参照)、子どもたちに繰り返し伝えていたことであった。「初めて」見られた「よかった」こともよく取り上げており、この日は振り返りの中で話題について話をしたこ

とであった(下線部⑤)。また、朝の会の限られた時間を大切にして取り組むことについても、繰り返し伝えていた(下線部⑥)。

子どもたちの多くは、Sが話を始める時になると毎回「先生は今日何を話すだろうか」と期待した表情になり、真剣に聞いていた。そして、Sから学んだことをその後のフリートークにいかそうとする姿がよく見られた。

②【事例3】「じぶんがやったーっておもうときはいつですか」

【事例3】は【事例2】から1ヶ月ほど過ぎた頃のn子の事例である(表5参照)。前述したように、n子は他の子どもたちとは違う問い方で話題を考えてきており(表3参照)、n子の話題を聞いて「どういうこと?」とつぶやく子どももいたが、すぐに理解してn子に代わって説明する子どももいた。n子が「じぶんがやったーとおもうときは」「絵がうまく描けた時」で、「デザイナーになりたいから」であった。n子も「大きくなったら何になりたい」(5月30日)という話題に「デザイナー」と答えており、「確かに」と言う子どももいた。また、n子が指名しようとする時に「すぐあてて」と声をかける子どももいた。フリートークでは自分が話せないまま終わることがよくあるため、この頃になるとこのような発言もよく聞かれた。

R男が答える前に「わかった」「セミを捕まえた時だ」と言う子どももいた。R男は「もしすきなものがかえるなら なにかいい」(9月5日)という話題に「クマゼミの卵1000個」と答えており、この頃になるとそれまでの友達の発言から理解したことをもとに発言を予

表5【事例3】 10月18日 「じぶんがやった一つのおもうときは いつですか」

話題提供	n子「やったーと思う時はいつですか」 J男「自分で？」 n子「私は絵がうまく描けた時です」 S「あ、ちょっと待って。今からって言った方がいいよ」 n子「今からフリートークを始めます」 子どもたち「イエーイ！」 拍手する n子「今日のお題は、自分がやったーと思う時はいつですか」 ・「え、どういうこと？」 P男「あのね、やった一つって喜ぶ時はいつですかって」 A男「あ、何回もあるわ」 n子「私は絵がうまく描けた時です。どうしてかと言うと、デザイナーになりたいからです」 ・「確かに」 i子「将来につながる夢」
フリートーク	子どもたち「ハイ！」と挙手する。 n子が指名していく。 i子「すぐあててね」 O男「すぐあててよ」 (以下は発言の一部) R男「ぼくがやったーと思う時は…」 ・「絶対そうや」 ・「わかった」 H男「セミを捕まえた時だ」 R男「セミを捕まえた時です」 ・「やっぱり」 R男「どうしてかと言うと、セミが大好きだからです」 d子「私がやった一つって思う時は「ピアノのコンクールとかで優勝した時です。どうしてかと言うと、頑張ってる」「すごい練習したから」 「優勝できたからです」 A男「ぼくは、釣りで、ブリが2匹釣れた時です。わけはありません」 G男「ぼくが一番やった一つって言うことは」「ひらがなのプリントのやつで、一発合格したら、うれしいです。どうしてかと言うと、今はあんまり一発合格がないからです」
振り返り	D男「思ったこと」 ・「(発言した人数は) 15人」 n子「私はいろいろな人のことを聞いてよかったです。みんなはどう思いましたか？」 (以下は発言の一部) D男「ぼくは、R君のセミを捕まえた時がいーなと思いました。どうしてかと言うと、セミはうまくとれる時ととれない時があるからです」 J男「いつものフリートークでは何と何どっちがすきですかなのに、n子さんが、違う問題を出してくれたので、うれしかったです」 e子「私はi子さんの、ピアノが大好きって言ったところがよかったです。どうしてかと言うと、私もピアノが大好きだからです」
Sの話	S「今日はね、いつもより多分難しかったかな。ただ、J君が言ったように、面白かったかなと思います。いつもと違うようなことが聞けたんじゃない？」 「ただ、R君みたいに、あ、やっぱりって思うのがね、また出てきたね」 「先生が素敵だなと思ったのは、dさん」「頑張ってるやつ」「優勝したとかいう時とか」「G君、なかなか一発合格ないんだけど、プリントで一発合格した時とか」「頑張ってるうまくいった時とかがいーんだなと思いました」 「(振り返りのD男の発言を挙げ) いつもとれるんじゃないんだね」「だからやった一つって思うんだってのも、なるほどーと思いました」 「e子さん」「ピアノのこととかをね、i子さんが言ったの、私もだなーと思ったんだなと思いました」 「お話の聞き方、上手になっている人います」「N君は」「(体を) ギュッと向けて聞いています。これよね(話し合って決めて掲示した「やくそく」を指して) 人の話を心を傾けて聴こうって」「これがいつもできてるんだって思って、感心しています。話す力も大事だけど、聞く力もとっても大事なので、お友達の話しっかり聞いて下さい」 「時計の針を見て下さい。今日もバッチリですね」

想し、予想通りだと「やっぱり」と喜ぶ姿もよく見られるようになった。

振り返りの内容も多様になってきており、n子は「いろいろな人のことを聞いてよかった」と話し、他の子どもも様々な話をしていった。当初「AとBどちらがすきですか？」という話題が続いたため、「違う問題を出してくれたので、うれしかった」と話す子どももいた。

Sはこの日もn子に話題提供者としての話し方や進め方を確認していた(下線部①)。そして、振り返り後にはいつもと違う話題であったこと、それでもR男のように「やっぱり」と思うことが出てきたことに触れていた(下線部②)。どんな話題でも、よく聞いているとその友達のことがわかることを伝えたいという思いがうかがえた。また、「素敵だなと思った」こととして、自分が「頑張ってる」よい結果が得られたという発言を挙げたり(下線部③)、「なるほど」と思ったこと(下線部④)を話したりもしていた。このように、Sはこの頃になると子どもの話の内容から他の子どもに感じとってもらいたいことを挙げることも増えていた。この他に、伝わりにくかった発言に「～と思ったんだなと思いました」(下線部⑤)と言う形で補足をしたり、友達の話をよく聞いている子どもの名前を挙げ、聞き方について具体的

に伝えることもしていた(下線部⑥)。

③【事例4】「ちょうのもりとふじさんとうみのなかでーばんすきなものはなんですか」

【事例4】は「ア」のタイプでも、選択肢を二つではなく三つにした話題を考えたL男の事例である(表6参照)。このアイデアは、「こわいはなしとおもしろいはなし どっちがすきですか」という話題で発言が少なかった日(9月25日)、L男が「もうちょっと手を挙げる人が多かったらいいなーと思った」「二つじゃなくて、三つとかに増やしてもいいんじゃない？」と発言し、Sに「ああ、発見」と言われたものである。L男は1ヶ月後の自分の話題提供に、そのアイデアを取り入れていた。選択肢にある「ちょうのもり」は、教室で育てたツマグロヒョウモンが羽化して飛び立った後、また来てほしいと願った子どもたちが話し合ったり調べたりして、教室横の敷地を草抜きし、家からも苗や種を持ち寄って作った庭である。生活科の学習という位置づけではあるが、「みんなで力を合わせて頑張った」ことが目に見える形になった場であった。

最初にL男の話題提供を聞くと、Sは「3つあるってことね。今日は」と確認し、ホワイトボードに書いた話題の選択肢部分を赤ペンで囲み、見やすくなるようにし

表6 【事例4】 10月26日「ちょうのもりとふじさんとうみのなかで ーばんすきなものはなんですか」

話題提供	L男「今からフリートークを始めます」 子どもたち「イエーイ！」拍手する (この日は4年生がフリートークを参観に来ている) L男「今日のお題は、ちょうのもりとふじさんとうみ、この中で一番すきなものは何ですかです」 ・「この中？」 L男「ぼくはちょうのもりがすきです。どうしてかと言うと、みんなで力を合わせて作ったからです」 S「3つあるってことね、今日は」L男がホワイトボードに書いた話題の中の「ちょうのもり」「ふじさん」「うみ」を赤ペンで囲む。
フリートーク	子どもたち「ハイ！」と挙手する。L男が指名した子どもが発言する (以下は一部。L男は急いで指名する。子どもたちも急いで立ち、早口で発言する。ほとんどの子どもが「ちょうのもり」と答える) k子「私はちょうのもりがすきです。どうしてかと言うと、ヒョウ君とツマちゃん(ツマグロヒョウモン)がよく来てくれるからです」 h子「私はちょうのもりがすきです。どうしてかと言うと、コスモスがきれいだからです」 G男「ぼくはちょうのもりがすきです。どうしてかと言うと、みんなで頑張って、作ったからです」 L男「もう誰もいない?ほかに誰もいないよね」 i子「言いたい人、全員あてたかも」 S「おお、すごい。言いたい人、全員あてたんだ。初めて?」 o子「わーやったー！」 子どもたち:拍手する 4年生も拍手する
振り返り	H男「全部で29」 i子「L君、何て思った?」 L男「ぼくはJさんとIさんとKさんの、ヒョウ君とツマちゃんが」 J男「aちゃんもだよ」 ・「qちゃんも」 L男「ヒョウ君とツマちゃんが時々来るからがいいと思いました。どうしてかと言うと、あそこに写真が飾ってあるからです」羽化したツマグロヒョウモンの写真を指さす ・「そうだねー」・「確かにそうですねー」 L男「他に思ったことはありますか?」 (以下は一部) D男「ぼくはL男君と同じ、Iちゃんとqちゃんとkちゃんの、kちゃんと誰やった?」 ・「J君」 D男「J君の、ヒョウ君とツマちゃんがいっぱい来るのがいいと思いました。どうしてかと言うと、ヒョウ君たちが来たら、うれしいからです」 J男「ぼくは、今日全員5分以内に全員あてたのがいいなと思いました」
Sの話	S「二つ言いたいことがあって、一つは質問があります」③「言いたいことの一つ目は、 <u>みんなで頑張って、頑張って、頑張って作ったちょうのもりがすごく思い出に残ってて、先生もうれしいなー</u> と思いました④」「二つ目は、 <u>みんなが全員がこれ今日言えた。5分以内</u> 」 「 <u>みんなが力を合わせたから、こんなふうに言いたいことがね、言えたんだなあ</u> と⑤」 「質問するよ」「A君が言うかなーと思ったら⑥」 A男:笑顔になる S「思った人?⑥」 子どもたち:多くが挙手する S「ちょうのもり、すごく頑張ってたから」「言わなかったのがどうしてか聞きたいなーと思うんだけど、みんなはどうですか?⑥」 「多分わけがあるんだよ」「A君、ちょっと言ってみて」 A男:黙っている ・「難しいんやろ」 ・「顔赤くなるとるよ」 S「A君の気持ちがわかる人いる?⑥」 子どもたち:多くが挙手する A男:立ち上がろうとする S「先に言ってみる?」 A男「ちょうのもりと海はどっちもすきですけど。海は船がいっぱいおるし」「魚もいるし、ちょうのもりは、みんなでいっぱい作ったから」 q子「どっちか迷ったから、手を挙げんかったんじゃない?」 o子「迷っちゃう」 A男「迷った」 S「迷った。選べないってことよね⑦」 「当たってたよーって人」 子どもたち:多くが挙手する ・「当たってた」 S「こんなにもいるんだね⑧」 「ということで、今日もいろんなことが見つかりました⑨」

た(下線部①)。

この日は4年生がフリートークを参観に来ていたこともあり、子どもたちはとても張り切っていて、L男は大声で指名し、指名された子どもたちは早口で発言していった。すると、話したい子どもが全員時間内に話すことができ、それに気付いた子どもが「言いたい人、全員あてたかも」と言うと、Sも「おお、すごい。言いたい人、全員あてたんだ。初めて?」と応え(下線部②)、子どもたちは拍手して大喜びしていた。この頃になると、友達の話の内容をよく覚えている子どもも多く、振り返りでL男が発言した友だちの名前を挙げて、「Oちゃんもだよ」と確認する子どもがいた。

振り返りの後、Sは「二つ言いたいこと」「一つは質問」があると簡潔に確認し(下線部③)、話を始めた。「言いたいこと」としては、「みんなで頑張って」「作ったちょうのもり」が思い出に残っていることが自分もうれしいこと(下線部④)、「言いたいことが」「言えた」のも、「みんなが力を合わせたから」(下線部⑤)だということを伝えた。

「質問」としては、「ちょうのもり」を「すごく頑

張ってた」A男が「言わなかったのがどうしてか」を挙げ、A男にだけでなく、他の子どもたちにも「みんなはどうですか?」「わかる人いる?」と問いかけていた(下線部⑥)。すると、多くの子どもが挙手し、A男が理由を話し始めると、話を聞きながらA男の気持ちを言葉にする子どももいた。Sは「迷った。選べないってことよね」と確認し(下線部⑦)、「当たってた」か問いかけると、また多くの子どもが挙手していた。その様子を見て、Sは「こんなにもいるんだね」(下線部⑧)、「今日もいろんなことが見つかりました」(下線部⑨)と話を終えていた。このように、Sは一人の子どもの気持ちや考えについて他の子どもたちに問いかけることをよく行っていた(表8【事例6】「Sの話」欄参照)。

④【事例5】「すきながっきはなんですか」

【事例5】は3回とも話題が「ア」のタイプのB男の事例である(表7参照)。この頃になると、子どもたちだけでフリートークを進めるようになっていた。B男は挙手をする子どもを一生懸命見回して、「～さん」と素早く手をさし出して指名していた。このように名前を呼びながらその子どもの方に手をさし出すのは、Sが入学

表7 【事例5】2月22日「すきながっきはなんですか」

話題提供	B男がホワイトボードを黒板に掲示する(いろいろな楽器の絵もかいてある)。・「がっき?」 b子「演奏するもの」 B男「今からフリートークを始めます」 子どもたち「イエーイ!」拍手する B男「今日のお題は、すきな楽器はなんですか、です」「ぼくはドラムがいいです。どうしてかと言うと」 D男「ドラムって何?」 B男「なんか、太鼓とかシンバルが合わさったもの」 L男「そんな感じ」 R男「家にあるよー」 B男「それが好きです。どうしてかと言うと、いろんな音を合わせると、全部の音を合わせると、どんな音になるのか分からないからです」
フリートーク	子どもたち「ハイ」と挙手する。B男は「～さん」とその子どもの方に手をさし出し、素早く指名していく(以下は発言の一部) L男「ぼくはウッドブロックがいいです。どうしてかと言うと」 Q男「何それ」 k子:ウッドブロックを叩くフリをして見せる H男「ぼくはラップが好きです。どうしてかと言うと、きれいだからです」 O男「ぼくは笛が好きです。どうしてかと言うと、面白いからです」 R男「ぼくはシンバルが好きです。どうしてかと言うと、1回も鳴らしたことがないからです」
振り返り	B男「ぼくはR男さんのがいいと思いました。どうしてかと言うと、ぼくはシンバルとドラムとどっちか迷ったからです」 「どう思いましたか?」(以下は発言の一部) j子「今日はよかったことが二つあったんですけど。一つ目は、今日は静かにしてたので、よかったなと思いました。二つ目は、B男さんがすぐに「言いつわり終わったら、すぐあてていたのでよかったなと思いました」 d子「j子さんと同じで、今日静かにしてたのでよかったです」「もう一つはjさんとすごく似ているんですけど、すぐあててたし」「女の子、男の子とか、男の子、女の子ってあててたので、すごかったです」 S「そんなこと考えてたの?B男君①」 B男:うなづく S「ふーん、伝わってるんだね①」
Sの話	S「お話ししてもいいですか?」・「はい」 S「一生懸命聞くなってはいいですが」「姿勢が崩れすぎるのは違うかなと思っています②」 「言ってもいいですか?」・「はい」(返事の声が大きくなる) S「目が合いますか?」・「はい」 S「みなさんが言うのが」「はやくなくて、先生は書くのが間に合わなくなってきました。それと、長ーく話す人が出て来て、例えばbさん。(b子の話を紹介する)それと反対で、短すぎるんじゃないかなというのをちょっと紹介します。例えば、ラップはきれいだからです。何がきれいなのかなって先生は思ったんですけど」「思った人いましたか?③」 子どもたち:数名挙手する。 S「きれいって何?形?色?③」 H男「音がきれい」 S「そうなんだよ。音がきれいって言ったらいいんだよ④」 S「というふうだね、少し長く説明できるといいかなと思っています④」 O男さんも「簡単に言い過ぎた。何て言った?③」 N男「笛」 S「笛がなんて?③」 N男「面白いから」 S「さすがNちゃん、よく聞いている⑤」 O君にとって面白いて感じることも、みんなにとっ て面白いて感じることも、一人一人違うから、何が面白いと思ってるか」「言ったらいいかなと思っています⑥」 「久しぶりのフリートークでしたが、どうでしたか?」 l子「おもしろかった」 a子「たのしー!」 S「楽器っていうのは初めて聞いたので、面白かったです⑥」

当初からしていたことであるが、この頃になるとほとんどの子どもが指名する際に同じようにしていた。

B男は振り返りでも自分の考えをてきぱきと話し、「どう思いましたか?」と問いかけていた。他の子どもの中には、B男が素早く指名し、男女どちらかに偏らないようにも気を配っていることが「よかった」「すごかった」と発言した子どももいた。また、「静かにしていた」こともよかったと話しており、この頃になると聞き方や話し方についても振り返りの中で発言する子どもが増えていた。

SもB男の考えはわかっていたはずだが、B男に「そんなこと考えてたの?」と尋ね、B男がうなづく、「伝わってるんだね」と応えていた(下線部①)。振り返りを終えた後には、聞く姿勢について再確認し(下線部②)、話が伝わりにくかった子どもの発言を取り上げ、「短すぎる」「簡単に言い過ぎた」と伝え、「何」が「きれい」なのか、「面白い」のかを問いかけ、「思った人いましたか?」と他の子どもたちにも問いかけていた(下線部③)。そして、話をよく聞いていた子どもの言葉も聞きながら(下線部⑤)、「少し長く説明できるといいかなと思っています」と伝えたり、自分と「みんな」が「面

白い」と感じることは「一人一人違うから、何が面白いと思ってるか」を「言ったらいいかなと思っています」と伝えたりしていた(下線部④)。

また、「楽器」という話題についても触れ、「初めて聞いたので、面白かったです」と話していた(下線部⑥)。その後、B男の「もしスポーツのものをもらえるならなにがいいですか」(3月8日)(表3参照)という話題に対して「よく知らない」という発言が多かった時も、Sは「素敵な考えるきっかけを作ったのかなと思います」と話していた。よく知らないことが話題になった時にも、そのことをきっかけに子どもたちに興味を広げてほしいというSの願いがうかがえた。

⑤【事例6】「もしドラえもののどうぐがつかえるならなにがいいですか」

【事例6】は小学1年生の学校生活も終わりに近づき、最後に行なったフリートークである(表8参照)。話題提供をしたk子は、【事例5】のB男と同様に3回とも同じタイプの話題を考えていた。k子が話題提供をし、「私はタケコプターがいいです」と言って理由も話すと、多くの子どもたちが「ハイ!」と挙手していた。この頃には「質問がある人が先に聞く」とみんなで決めてい

表8 【事例6】3月19日 「もしドラえもののどうぐがつかえるなら なにがいいですか」

話題提供	k子がホワイトボードを掲示する(ドラえものの道具の絵もたくさん描いている)「今からフリートークを始めます」 子どもたち「イエーイ!」拍手する k子「今日のお題は、もしドラえものの道具が使えるなら、何がいいですか」 k子「私はねえ、タケコプターがいいです。どうしてかと言うと、空を飛べるからです」
フリートーク	A男「質問 k子「A男さん」 A男「ドラえもんでもいいですか?」 k子「あ、いいですよ」 A男「ぼくはドラえもんがいいです。どうしてかと言うと、いっぱい道具を持ってるし、ネコ型ロボットだし、何でもできるからです」 k子「q子さん」 q子「二つ道具を言ってもいいですか?」 k子「はい。道具ならいいです」 q子「なら、えっと、私はどこでもドアとタケコプターがいいです。どうしてかと言うと、どこでもドアは ・「どこでも行ける」 q子「どこでもドアをあけたら行けるし、タケコプターは、空を飛べるからです」 k子「a子さん」 a子「ジャイアンでもいいですか?」 k子「だめです」 a子:そのまま座る (その後も様々な道具の名前が出る)
振り返り	k子「私はj子さんがよかったです。どうしてかと言うと、確かにポンポコタヌキの大正解って面白かったな一と思ったからです」 k子の話を聞いて、数名が笑う。 k子に指名された子どもが話をしていく。 (「〜がでなかったのはなんでかな一と思いました」という発言が多く、「ああー!」「確かに!」という声も聞かれる) k子「これでフリートークを終わります」 子どもたち:拍手する。 ・「いいお題やった」 S「いいお題やった、ほう」 Q男「いいお題やった」 A男「めっちゃいいお題やった」 j子「みんながわかっことやった」
Sの話	S「最後にふさわしい、すごい楽しそうなフリートークでした。でも、悲しそうな人がいます。誰でしょう?①」 子どもたち:口々に話す。 k子「Oちゃん」 S「Oちゃん、悲しかった?」 O男「最後に言えなかったけん」 S「ああ、言えなかったから、悲しかった。言った中で悲しかった人いるんだけど、さてなぜでしょう?②」 k子「a子ちゃん」 S「a子ちゃん、悲しかったねえ③」 a子:うなずく。 S「目に涙浮かべてたねえ④。じゃあ、なんでa子ちゃんは悲しかったんでしょう?⑤」 A男「あ、だめだめって言われた」 S「だめだめって言われたよね」「そりゃだめだろうって思った人、手を挙げて⑥」 A男「道具じゃないもん」手を挙げて k子「ジャイアン、道具じゃないもん」 子どもたち:口々に話す S「いっぺんに話すのやめてね。(Sに話しかけるL男に) L君、ちょっと言ってみて⑦」 L男「なのに、どうしてドラえもんはいいの?」 A男「先生、あのね、ネコ型ロボットやから」 I男「ドラえもんも、人間から発明されてる」 S「理由はあったんだけど、悲しい人がいる。そういう時にどうやって悲しくないようにすればいいんだろう?」「いいよはいいの?⑧」 A男「それはだめ」 I子「強く言いすぎたんじゃない?」 e子「ダメダメも違う」 I男「ダメを1回ぐらいこしたらいいい」 A男「道具じゃないからダメ」 I子「理由を言ってから」 S「Iさん、何だって?」 I子「理由を言ってから」 S「そう。わけ(理由)がわからなかったんだよ。a子ちゃん⑨」 a子:うなずく。 k子「でも、(ホワイトボードに) どうぐって書いてある」 S「それが、ダメだけじゃ伝わらなかったんだよ⑩」「だから、他の人がそういう時に」「助けてあげるんだよ」「多分a子ちゃんはこういう気持ちだったんじゃないかと思えますとか」「a子ちゃんこうなんだよと教えてあげるとか⑪」 S「せっかくの楽しいフリートークが、悲しい人がいたら?」 e子「台無しになる」 b子「台無し」 S「ただ、それをk子ちゃんだけに任せるのは難しかったから、他の人がわかったら助けてあげたらよかったかな⑫」と思いました」

たため、始めにA男、q子が質問し、k子が「いいですよ」と答えた後に自分の考えを話した。しかし、次に質問したa子はk子に「だめです」と言われ、そのまま座ることになった。

振り返りも終え、「いいお題やった」「みんながわかっことやった」と満足する子どもが多い中で、Sは「最後にふさわしい、すごい楽しそうなフリートークでした」と話した後、「でも、悲しそうな人がいます。誰でしょう?」と問いかけ(下線部①)、それはなぜかについても問いかけていた(下線部②)。そして、k子が「a子ちゃん」と気づくと、「悲しかったねえ」とa子の気持ちを言葉にし(下線部③)、なぜa子が悲しかったのか子どもたちに問いかけていた。「だめだめって言われた」と言う子どもがいると、他の子どもにもそう思ったか問いかけ(下線部④)、「だめ」な理由がわからない子どもの話も聞きながら(下線部⑤)、「道具ではない」という理由を確認し、「理由はあったんだけど、悲しい人がいる」時にどうするとよいのかをさらに問いかけていた(下線部⑥)。そして、「理由を言ってから」という言葉を聞き逃さず、「そう、わけがわか

んなかったんだよ」と確認し(下線部⑦)、フリートークを進める立場にあるk子の大変さにも言及しながら、「他の人がわかったら助けてあげたらよかったかなと思いました」(下線部⑧)と伝えていた。このように、最後のフリートークにおいても、Sは「困り感」をもつ子どもの存在を知らせ、どのようにするとよいか子どもたちに考えるように問いかけ、みんなで助けていくことの大切さを伝えていた。

#### IV 総合考察

本研究では「話題に沿って子どもが自分の考えを述べ合う話し合い活動」であるフリートークを小学1年生の子どもたちが朝の会においてどのように行なうのか、教師はどのような支援を行ない、その支援によってフリートークの内容がどのように変容するのかを検討してきた。

このクラスの教師Sは、1年生の担任経験だけでなく幼稚園での保育経験もあるため、子どもの実態をふまえ、授業で学習したこととも関連させながら話し合い活動を考えていた。入学当初は互いを知り合い仲良くなることを願い、朝の会では健康観察で全員が話題について話す

こと、理由も話すことを経験できるようにしていた。7月からは友達の「宝物」をあてるクイズトークも行ない、自分の「宝物」を紹介したい、友達の「宝物」を知りたいという思いを大切にしながら、自分なりに考えて友達に質問する、友達の質問に答えるという経験ができるようにしていた。

このような経験を重ねた後、8月末から開始したフリートークで子どもたちが考えた話題は、自分が「好きなもの」「好きなこと」に関連するものが多かった。話題提供をする子どもにとっては、その話題について自分の考えを話したり、友達の話を聞ける楽しさがあり、他の子どもたちにとっても、その友達ならではの話題を聞き、その話題について考える面白さ、話す楽しさがあるのだろう。その中で、子どもたちは互いのことをより分かり合う経験を重ねていた。

当初のフリートークでは、子どもたちが話し方、進め方を理解できていなかったり忘れていたりすることも多く、Sがその都度気づかせるための支援をしていた。子どもたちの発言も、前の子どもが話した内容を真似た内容となるものが多く(表4【事例2】「振り返り」欄参照)、教師の示すモデルや他の子どもの「発話形式を積極的に取り込むことによって、考えを伝える発話を習得」(清水・内田, 2001)しようとする様子が見えがえた。

Sは子どもたちが振り返りまで終わると、毎回すぐにその日の子どもたちの具体的な言動を挙げながら、子どもたちに伝わりやすい言葉を選んでポイントとなることを簡潔に話していた。その際には、「よかった」「素敵」なことは子どもの名前を挙げながら話し、修正してほしいこと、考えてほしいことは「～かなと思っています」等の表現で「みんな」に伝える形で話すことが多かった。

Sは一人の子どもへの問いを他の子どもたちに向けて問いかけることも多かった(表6【事例4】、表8【事例6】参照)。磯村ら(2005)は小学2年生が経験を語り合い共有することを重視した道徳の授業を観察し、教師が子どもに「みんなに向かって言ってくれる？」と他の子どもたちを示し、子どもが発言した後に、他の子どもたちに「わかる？」と問いかける場面に着目している。そして、その教師の発話は「みんな」を「わかる」かどうか問われる立場(相手の発話を聞き理解すべき立場)にある者として明確に位置付けていると述べている。入学当初から子どもたちに「どうするとよいかみんなで考えよう」「○○ちゃんが困っているの、わかる？」と話してきたSによるこのような支援にも、同様の意味があると考えられる。

子どもたちはフリートーク後のSの話を楽しみにし、Sの話から学んだことをその後のフリートークにいかそうとしていた。例えば、【事例4】(表6参照)のL男

は自分のアイデアをSに「発見」と言ってもらったことを覚えており、1ヶ月後の自分の話題提供に取り入れていた。教師の「価値付け」(松岡, 2012)がいかに重要であるかがわかる。そして、このようなSの支援によって、フリートークの中で「話す力、聴く力、話し合う力」だけでなく、「仲間の考えに共感したり、仲間のよさを感じたりする」力も少しずつ育っていったことを子どもたちの具体的な姿から確認することができた。

本研究は小学1年生の朝の会におけるフリートークについて1クラスの実践を取り上げて検討してきた。今後も様々なクラスの実践を取り上げて、朝の会においてフリートークをすることが子どもたちの育ちにどのようにつながるのか、教師にはどのような支援が求められるのかについて検討していきたい。

## 引用文献

- 磯村陸子・町田利章・無藤隆 2005 小学校低学年クラスにおける授業内コミュニケーション：参加構造の転換をもたらす「みんな」の導入の意味、発達心理学研究, 16-1, 1-14
- 桂聖 2006 クイズトーク・フリートークで育つ話し合う力, 学事出版, 46-61
- 清水由紀・内田伸子 2001 子どもは教育ディスコースにどのように適応するか—小学1年生の朝の会における教師と児童の発話の量的・質的分析より—, 教育心理学研究, 49, 314-325
- 中島寿子・志賀直美・大森洋子・高田和宜 2019 附属山口小学校1年生のフリートークにおける経験と教師の役割—幼小接続の視点もふまえて—, 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 48, 59-68
- 松岡修司 2012 分かり合い、支え合う関係をつくるフリートーク, 奈須正裕監修 山口大学教育学部附属山口小学校, 学びの実感がある授業をつくる—附属山口小学校の授業とフリートークの取り組み—, 学校図書, 172-175

## 付記

本研究は以下の平成30年度山口大学教育学部「学部・附属共同プロジェクト」の成果の一部を取り上げ、さらに分析したものである。

中島寿子・志賀直美・大森洋子・高田和宜 附属山口小学校1年生のフリートークにおける経験と教師の役割—幼小接続の視点もふまえて—